日本基督教団 新横浜教会月報　　2023年4月9日（第190号）

鶏（けいめい）鳴

〒221-0864
横浜市神奈川区菅田町2851
（電話 045-473-7191）

聖書の言葉

「神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降（くだ）って来られます」

聖書（第１テサロニケ４章１６節）

牧師　河合裕志

聖書には主イエスが再び世界に来るという考え方がある。これを再臨（パルーシア）と言ったりする。かつて一度イエスは地上に来た。そして最後十字架につけられて亡くなった。その後イエスは復活して天に上り父なる神の右に坐している。そこからいつの日かまたイエスが到来する。こう聖書に言われている。

１度目の来臨の目的は全ての人間の罪を背負って十字架につき罪の赦しをもたらすためだった。それなら２度目の目的は何だろう。それは最後の審判を行い、世界を新天新地とする、完全に平和な神の国とする、というもの。世界は核戦争によって滅亡に終わるのではなくイエスの到来により恒久平和がもたらされるということ。そんなバカな、と思われるような終末観、未来観。これを聖書は伝え、信徒は信じている。

そうとしていつそんなになるのか。いつイエスは来るのか。パウロはここで「主が来られる日まで生き残るわたしたち」と言っている（１５節）。パウロらの生存中に主イエスの到来はあると。随分と切迫した終末理解。これって実現した？　どうもそうは思われない。世界は相変らず混沌としている。パウロは期待が大き過ぎて見込み違いをしているみたい。

ただその後のパウロの手紙を見ると切迫度がゆるまって来ているよう。テサロニケ書はパウロの最古のもの。その後のフィリピ書では「肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です」と言い「この世を去って、キリストと共にいたい熱望」と闘っている（１・２３～２４）。つまりイエスの再臨はもう少し先でも結構です、との思い。ローマ書１１章等を見ると再臨はまだズーッと先と考えていたように思われる。そこには遂に異邦人全体が救いに達する、その後に全イスラエルが救われると実に壮大な事が述べられている（２５～２６節）。そこには相当の年月が必要だろう。

いつ再臨、終末、世界の完成に至るのか、それは残念だけれど誰にもわからない。パウロだって見通せない。イエスにもわからない。父なる神のみぞ知るところ（マルコ１３・３２）しかしいつの日かその日は来る。そう信じて現状に絶望しないでなお望みをもって生きて行く。眠りこけないで人間の側における責任をコツコツと果して行く。平和とか環境保全のために祈りと努力を傾ける。これは大事なこと。

集会案内

日曜礼拝：午前10時15分、夕拝：午後6時
子どもの教会：日曜日午前9時
中高青年会　：日曜日礼拝後
聖書を学び祈る会：水曜日午前10時
牧師面談：水曜日午後1時～7時